

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊30年目 Nr. 350

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2018年11月号

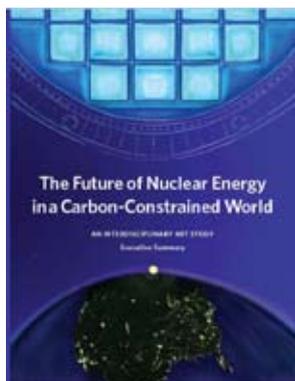


Pieter Bruegel d. Ä. (um 1525/30 vermutlich in Breugel oder Antwerpen - 1569 Brüssel)
Bauernhochzeit Um 1567, Eichenholz, 114 × 164 cm Kunsthistorisches Museum Wien, Gemäldegalerie © KHM-Museumsverband
ピーテル・ブリューゲル 「農民の婚宴」部分 1567年頃 ウィーン美術史博物館所蔵
ウィーン美術史博物館『ブリューゲル』展にて展示



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 83

マサチューセッツ工科大学 (MIT) のエネルギー・イニシアティブは、九月三日、「炭素制約の世界における原子力エネルギーの将来」と題する共同研究報告書を公表した。同報告書は、MITが発刊する「低炭素社会におけるエネルギー需要増加に適合した技術の探索」シリーズの八作目である。この研究は、バランスが取れ、事実に基づき、原子力関係者に向けた分析を主としたガイドとなるように行われた。政策立案者、公益事業、既存および新興のエネルギー企業、規制当局、投資家、その他電力関係者が、米国および世界の原子力エネルギーが現在直面している課題と機会をより良く理解するためにこの研究成果を利用できるとしている。この報告書は、二間に及ぶ調査研究、現状の把握および定量的モデル作成とそれによる解析の成果である。本研究には、我が国からは尾本彰東工大特任教授が諮問委員会委員として参加している。



https://www.jaif.or.jp/the-future-of-nuclear-energy-in-a-carbon-constrained-world

同報告書によれば、「世界の大部分の地域で、二〇五〇年に予測される電力需要に対応しながら同時に排出量を削減するには、現在のシステムとは異なる発電設備を混在させる必要がある。さまざまな低炭素技術またはゼロ炭素技術をさまざまな組み合わせで使用することができ、我々の分析では、原子力が必要に柔軟に対応する低炭素技術として貢

献できる可能性を示している。その貢献がなければ、大幅な脱炭素化目標を達成するためのコストは大幅に増加する」としている。一方で原子力の利用拡大にもコストが基本的な問題となっており、これに対処するためには、「新規原子力発電所建設の成功の確率を高めるため実証済みのプロジェクト・建設管理の実績の利用に重きを置く、煩雑でサイト特有部分が多く現場施工に大きく依存する部分があるプラントからシリーズ生産可能な標準化プラントに変える、固有かつ受動的な安全機能を組み込んだ原子炉設計への移行、全ての低炭素発電技術それぞれが持つメリットをベースに競うことを可能にする公平な競争の場を脱炭素政策として用意すべき」ことを推奨している。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、本庶佑・京都大学特別教授が今年のノーベル生理学・医学賞に選出されたことから、両市の同賞受賞者について述べてみたい。ウィーン出身の同賞受賞者は、ローベルト・バーラー(一九二四年)、ユリウス・ヴァーグナー・ヤウレック(一九二七年)、カール・ラントシュタイン(一九三〇年)、オットー・レーヴィ(一九三六年)、コンラート・ローレンツ(一九七三年)の計五名である。このうち、精神科医のユリウス・ヴァーグナー・ヤウレックは、一九世紀に爆発的に増加し、わずか数十年前までは全世界で猛威をふるっていた梅毒の末期症状である進行麻痺に対して一九一七年、画期的な治療法であるマラリア療法を發明し、多くの人命を救った。なお一九四四年にはペニシリンにより進行麻痺が劇的に改善することがわかり、進行麻痺は完全に過去の病気となった。

一方、京都大学出身の同賞受賞者は、利根

川進教授(一九八七年)、山中伸弥教授(二〇二二年)と今回の本庶佑特別教授の計三名である。利根川教授は、体内に侵入してきたばい菌やウイルスなどの異物に対し、リンパ球B細胞の遺伝子組み換えにより、無数の異物に対して無数の抗体を作る免疫グロブリンの再編成メカニズムを解明した。山中教授は、僅か四つの遺伝子を皮膚細胞に導入することにより、様々な体細胞に分化可能な多能性細胞(iPSC)細胞を作製することに成功した。本庶特別教授は、免疫抑制分子であるPD-1分子を同定し、PD-1分子による免疫寛容機構を解明し、さらに、PD-1阻害薬(製剤名オプジーボ)を開発して癌治療に寄与することを実証した。両大学のノーベル生理学・医学賞受賞者は、同分野において人類のために大きな貢献を果たしたことが共通している。余談であるが、著者は若い頃コンラート・ローレンツの動物行動学に関する本をよく読んだ。京大に赴任した翌年には山中教授、東工大に赴任した年には大隈栄登教授のノーベル生理学・医学賞受賞の発表があった。どちらもまたまなののであるが、同賞には少々縁を感じている。両市のノーベル生理学・医学賞にまつわる話を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたユリウス・ヴァーグナー・ヤウレックのウィーン大学にある胸像の写真を掲載させていただく。



杉本純 元京都大学教授 元原子力機構ウィーン事務所長

杉本純の原子力の話II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています: <http://wattandedison.com/Sugimoto.html>



レナード・バーンスタインの末娘 ニーナ・バーンスタインさん 2018年10月ユダヤ広場博物館にて

レナード・バーンスタイン

今年(2018年)は米国のピアニストで作曲家で指揮者レナード・バーンスタイン(1918年~1990年)の生誕百年にあたり、ウィーンでも様々な特集が組まれてきた。音楽ではとりわけ、1988年から1990年までバーンスタインのアシスタントを務めた愛弟子の佐渡裕さんがトーン・キーンストラ管弦楽団を率いてバーンスタイン作品を楽友協会などで指揮した。展覧会では、ユダヤ広場博物館で「レナード・バーンスタイン:ウィーンのニュー Yorker」、ハウス・デア・ムジーク(音楽の家)中庭で「レナード・バーンスタイン生誕百年」が開催されている。どちらの展覧会にもバーンスタインのフロックが展示されている。

